

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.841 2024

2024年11月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL : <https://www.ymcajapan.org/>
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



OPINION

「わたしは何者でしょう」

—全国学生YMCA夏期ゼミナール50回記念礼拝より—

日本キリスト教団新潟教会牧師 長倉 望

モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」(出エジプト記3章11節)

自分の人生、自分らしい人生のスタートに、学生YMCAがありました。“自分らしさ”を獲得していくことは、特別な力をつけていくのではなく、異なる他者と出会い、自分が生きて行く社会・世界と出会い、その歴史と出会う中で、自分の弱さや愚かさを知ること、自分の痛みや悲しみを知ること、デコボコでいびつな自分の姿を削り出していくことでありました。同時に自分を縛り付け、閉じ込めているものから、解放されていくことだったのだと、いま振り返って思います。そこには、聖書からの問いかけと、共に道を探す仲間たちの存在がありました。

大学1年の終わりに学生YMCAインドワークキャンプに参加し、ボーイズホームという貧しい子どもたちが共同生活を送る施設に40日間、滞在し、寝食を共にしました。明日もわからぬような混沌に見えたインドで、目を輝かせ希望をもって懸命に生きる子どもたち。自分よりもよほど傷つき、厳しい状況に生きる子どもたちなのに、日本から来た私たちを本当に大切に受け入れてくれ、「いままで自分は人との出会いや関わりをこれほどまでに大切にしていたらどうか」と落ち込みました。親が育てることができない子どもたち、道に捨てられてしまう障がい者や老人たちが集められたいくつもの施設で、命の尊厳を回復し共に生きようと身を献げる大人たちの姿に、「誰のために」「何のために」生きるのか、「自らに与えられた命を何に用いるのか」という使命感に、圧倒されました。

いま、私たちは「生きるべき使命」を見だしにくい世界に生きているのかもしれない。そして、苦しみの叫びをあげる隣人が見えなくされている、よしんば見えたとして「どう共に生きるのか」がわからない。(冒頭の)モーセのように「私にどうしろというのですか」と叫ばざる得ない世界を生きているのかもしれない。大学時代、学生YMCAの寮生活や国内外のプログラム、聖書研究に参加する中で問われ、考えてきたことはまさに「私は何者か」というモーセの叫びではなかったか。少なくとも私が学生YMCAで経験してきたことは、自らを活かす使命と、共に生きる隣人を回復していくチャレンジであったと思うのです。

そのようなチャレンジができたのは、共に道を探す仲間がいたからです。インドからの帰国後、「人を大切にする」「関係を主体的につくっていく」最初の実践の場となったのは、自分の暮らす学生YMCA寮でした。全国から大学生が集まる学生YMCA夏期ゼミナールでは、私たちは共に道を探す仲間になっていきました。

50回目を迎えた全国学生YMCA夏期ゼミナールで、“自分らしい”人生は、大変なこともいっぱいあるけれども、喜びもいっぱいであることや共に生きる仲間がいることの豊かさや励ましを学生の皆さんに伝え、命を守り育てる使命を分かち合う私たち一人ひとりの旅路に、神様が大きいなる励ましを与えてくださることを、改めて祈りたいと思います。(東北大学YMCAシニア)



●全国のYMCAのさまざまな活動はこちらからもご覧いただけます。 <https://www.ymcajapan.org/>



学生YMCA

暴力と戦争の世界を 生きのびるために

第50回記念 全国学生YMCA夏期ゼミナール

テーマ 「小さな私、弱いあなた」 9/13~15

「学生YMCA (略称「学Y」) は、全国の大学を拠点にした学生中心の活動です。現在は37の大学にあり、その内10大学では学生寮を運営しており、約450人が参加しています。日本で最初に学生YMCAが設立されたのは1888年(明治21年)。以来130年余にわたって学生たちが集い、寮生活やサークル活動、聖書研究、海外プログラムなどを通して仲間と出会い、成長していく場となっています。

中でも「全国学生YMCA夏期ゼミナール」は毎年、第一線で活躍する専門家による講演会、聖書からメッセージを聴く聖書研究、ワークショップなどを通して、社会の課題に向き合い、学び、交流する大きな行事です。過去には沖縄基地問題やジェンダーなどについて

学んだ年もありました。

50回の節目を迎えた今年のテーマは「小さな私、弱いあなた～暴力と戦争の世界を生きのびるために」。世界には戦争・紛争で傷つき、命を落とす子どもたち、戦闘に駆り出される若者たちがいる今日。“平和”と言われる日本社会でも、学校や教育現場での熾烈な競争やいじめ、若年層の自死と言った“暴力”があふれています。「大きくて強い」ではなく「小さくて弱い」、その視点から何か世界に希望と変化を導き出すことができるのではないか——。しばし立ち止まって考えてみようという9月13～15日、御殿場のYMCA東山荘に50人が集まり、さまざまな講師や卒業生とともに本気で語り合いました。



夏期ゼミの学び

テーマ講演「国際社会と戦争」では同世代のウクライナ避難者(下記)から、また「教育現場と暴力」では、新林智子さん(右記)はじめ、教育現場に関わる小林直樹さん(大阪YMCAスタッフ)と、菅沼慎一郎さん(大学教員、京都大学YMCAシニア)からも発題がありました。聖書研究では洪伊杓牧師が「私たち人間と共に苦しむ無力な神、だからこそ私たちに救いがある」と語られたほか、学生たちによる自主ゼミナールでは「パレスチナへのまなざし」「学校」など多様なテーマで発題がされました。世界YMCAチェンジエージェント坂地みずきさん(横浜YMCA、清泉女子大学YMCAシニア)からはVision2030の紹介もありました。

テーマ講演 戦争から逃れて「誰も殺したくない」

17歳のときに、戦争が起きました。キウウの自宅にいて、銃撃戦の音を聞き、近くの通りにミサイルが着弾し、負傷兵や遺体を満載した軍用トラックが通り過ぎるのを窓から見ました。18歳になったら、徴兵や出国禁止の対象になるので、「国を出るなら今しかない」と思い、リュックを背負って一人、国境を目指したのです。「逃げるのか。戦争に行かないのか」と周囲の人たちから責め立てられ、襲われました。非常時だと理解はしているし、兵士として戦っている親戚や戦死した友人もいます。でもやっぱり、僕は人を殺すことができません。



Robert Tkachnekoさん

日本で暮らすウクライナ避難者。日本の学生からの質問に、「残念ながら、戦争はまだ何年も終わらないと思う。未来に目を向けて自分の人生を歩みたい」と答える

日本に来て3年目の夏を迎え、20歳になりました。将来、宇宙工学に関わる仕事がしたいので、都立高校に入り1年生からやり直しています。公的な生活費の支援がなくなってしまったので、無償の公営アパートに一人で住み、学校に自転車で行き、そのまま食品配達のアバイトをする毎日です。家族のことが恋しい。会いに行きたいですが、お金もないし、何より一度帰ってしまったらもう出国できません。いまは、日本人の友だちがほしいです。「いつか、国に帰ってしまう人」ではなく、「本当の友だち」として、深い話をしてくれる、そんな友だちをYMCAで作りたいのです。

テーマ講演 教育現場での“暴力”とは

幼児から高校生を対象に、スクールカウンセラーとして働いていると、さまざまな暴力にぶつかります。おとなから子どもへ、子どもからおとなへ、子ども同士、おとな同士の間で起こり、体罰・校内暴力・学級崩壊のような「見えやすい」ものと、いじめ・同調圧力・競争など「見えにくい」ものがあります。「見えにくい」暴力は、「学校に行かなきゃいけないけど、しんどい」「自分がおかしいのではないか」といった、もやもや感で表現されることが多いです。性暴力や家庭内暴力も「見えにくい」ものです。ひと昔前は、学校のガラスを割ったり、先生や親へ反抗するなど、自分の外側に攻撃が向けられていたけれど、いまは、リストカット、薬の過剰服用など自分に向かっていく傾向があります。何か起こったら、子ども自身や家庭の問題、発達の課題など、個々人の問題のみに原因を求め、集団から距離を取ったり、特別な配慮や管理をしたりして対処しがちです。しかし、そもそも、子どものいる集団の方はどうなのか。集団の質がおかしくなって、追い込まれ、弾かれる現れではないのか、捉え直すようにしています。個々人の問題として対処するほど、結果として、集団の同質性が高くなり、息苦しい、自由のない集団になってしまうという矛盾が起きています。それが私たちの直面する社会の「構造的な問題」であり、暴力を生む土壌をつくるのではないかと感じます。



新林 智子さん

臨床心理士
スクールカウンセラー
九州大学YMCAシニア

いじめ事件の調査に加わったとき、学校の子どもの集団・関係の厳しさはもちろん、教職員集団、保護者、地域のおとなたち、それぞれが自分の領域で手いっぱいな状態とわかりました。実は、子どももおとなも、一人ひとりの痛み傷ついた心が置き去りにされ、見過ごされ、分断させられている。学校で起こる事件を、学校や教職員を責め「誰かのせいにする」だけでは、どうしようもないのだと感じました。そこでいま、学校という公共の場を、子ども、先生、保護者、地域みんなで、つくり支えることに、励んでいます。

学生YMCAの今 コロナ禍の打撃と新たな「参画」の芽生え

多くの大学生にとって、活動に打ち込めるのは3年間です。学生YMCAの歴史も伝統も、この間に上級生から下級生にバトンとして受け継がれてきました。しかしコロナ禍で高校の卒業式もなかった世代は大学入学後もほとんど活動体験を持ってないまま、いまは大学3、4年生となっていて、事実上、活動の継承が絶たれてしまいました。学生YMCAの長い歴史の中、このような断絶が起きたのは太平洋戦争、そして大学紛争以来です。このような状況でも、学生YMCAの寮では共同生活という人間関係を持続し、学生を孤立や孤独から守る場となり、130年以上にわたり受け継いできた学生YMCA運動の「器」として、寮の価値が再評価される場面もありました。

やっとの思いで対面での活動が再開、定着し始めたいま、「学生YMCAの回復とこれから」をここ数年の夏期ゼミナールでの学生たちの様子をヒントに考えてみました。2020年のオンライン開催から2024年の今回まで、学生部委員やシニアが夏期ゼミの企画と運営の中心にいました。従来、テーマ設定や企画運営も学生たちが担っていましたが、実際に参加した先輩が身近におらず、その魅力や意義を想像することも難しく判断してのことです。このような学Yシニア(卒業生)の関わりも学生YMCAの「宝」であります。

その後、東山荘での夏期ゼミが続く中、徐々にリピーターとして参加する学生が増え、学生自身が準備して発題する自主ゼミナールが活況となり、「次は自分たちでも企画や運営に関わってみたい」という声がかかれるようになりました。用意されたプログラムに「参加」する学生から、自らが主体となる「参画」への意識が芽生えてきたのです。

サークル形式の学Yでは多くの1年生の姿が見られるようになり、寮では将来に向けて再建計画や募金などが始まり、継承のバトンが復活と再生を始めています。学生たちがいまを生きる社会の課題に広い視野を持ち、未来に向けて学び、出会える場としてこれからも歩みを進めていきます。

日本YMCA同盟 石橋 英樹

学生YMCAの活動

学生YMCA寮

全国10の大学にある学生寮で、学生による自治運営を伝統としています。寮生全員が参加する定例会議で生活のルールなどが決められ、忌憚のない話し合いの中で共同生活を築いていきます。人とのつながりを大切に生活の中で多くの有為な人材を輩出しています。



サークル活動

大学のキャンパスを拠点に、サークルとして活動しています。学生たちの関心に応じて活動内容を決めており、たとえば、被災地ワークキャンプ、障がい者施設や学童保育でのボランティア、地域イベントへの出展、フィールドワークなど、多岐にわたる活動を展開しています。

海外プログラム

海外のYMCAネットワークを活かし、韓国学生YMCAとの交流プログラム、インドスタディキャンプなど多様な国際交流プログラムを行っています。また、WSCF(世界学生キリスト教連盟)にも加盟し、研修や会議に参加しています。



学生YMCAの現況

地区	形態	学生/OBOG会が活動する学生YMCA・YWCA
北海道・東北地区	学生寮	北海道大学YMCA汝羊寮、東北大学YMCA淡水寮
	サークル	弘前学院大学YMCA、尚絅学院大学YMCA、宮城学院女子大学YWCA
関東地区	学生寮	東京大学YMCA、早稲田大学YMCA信愛学舎、一橋大学YMCA一橋寮
	サークル	立教大学YMCA、慶應義塾大学YMCA、中央大学YMCA、清泉女子大学YMCA
関西地区	学生寮	京都府立医科大学YMCA橋井寮、京都大学YMCA地塩寮
	サークル	神戸女学院大学YMCA、関西学院大学YMCA(上ヶ原・三田・聖和キャンパス)同志社大学SCA、大阪YMCA国際専門学校学生YMCA、神戸大学YMCA
中・四国地区	サークル	広島大学YMCA、広島女学院大学YMCA
九州地区	学生寮	九州大学YMCA一麦寮、長崎大学YMCA浦山寮、熊本大学YMCA花陵会
	サークル	九州ルーテル学院大学YMCA、西南学院大学YMCA、活水女子大学YWCA

休会中 岩手大学YMCA、東北学院大学SCA、弘前大学YMCA、青山学院大学SCA、日本社会事業大学YMCA、国際基督教大学YMCA、フェリス学院大学YMCA、桃山学院大学SCA、大阪大学YMCA、鳥取大学YMCA、同志社女子大学YWCA 加盟設立準備中 山梨英和大学、四国学院大学

● 学生YMCAホームページはこちら >>> <https://www.ymcajapan.org/society/student/>

パラリンピック競泳の富田宇宙選手 東京YMCAチャリティーランに参加



今年から「YMCAインターナショナル・チャリティーラン全国大会委員長」に就任されたパリ2024パラリンピック競技大会競泳メダリストの富田宇宙選手（EY Japan）が9月28日、東京YMCAのチャリティーランに参加。園児や学生、企業の社員や障がいのある方々など約1千人と共に走りました。

開会式で富田選手は「僕自身、スポーツを通して元気になることができた。選手としてメダルを目指すだけでなく、スポーツを通じてさまざまな人が健康で、元気で、より良い人生を送ることが大切だと思っています。皆さんと一緒に楽しく走り、喜びを分かち合えるような一日にしたい」とあいさつ。ランの前後には2つの銅メダルを展示して参加者と交流。子どもたちも大喜びでした。

走るのには学生時代以来という富田選手。ラン後のインタビューでは、「パリ・パラリンピックでは1万8千人の観客の前で泳いだけけれど、水の中では声援は聞こえないんです。でも今日は多くの人が声をかけてくれた。声援の中を駆け抜けるという水泳にはない体験ができた。みんなで応援し合いながら頑張る楽しさを実感しました」とコメント。富田選手はすでに次の大会に向けて練習を始めつつありますが、「楽しく走ることが障がいのある子どもたちの笑顔につながる。このすばらしい循環をぜひ大会委員長として盛り上げていきたい」と、今後も横浜、大阪、神戸、熊本で予定されているチャリティーランに参加の予定です。

▼チャリティーランの詳細はこちら

<https://www.ymcajapan.org/charityrun/>



能登半島豪雨

ボランティア作業続く

地震の傷の癒えない能登半島で、豪雨に遭われた皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。大きな悲しみと不安の中にある被災地に、一日でも早く平穏な日が訪れますよう、切にお祈り申し上げます。

輪島市の中心から車で1時間ほどの山間にある町野町。9月21日の豪雨以来その惨状がしばしばメディアに取り上げられてきたこの町は、YMCAが1月から6月までスタッフ延べ90人を派遣し、地域の皆さまと共に避難所の運営をした場所です。現地では地震後の解体工事が遅れていたため、豪雨による土砂や流木が倒壊家屋に押し寄せる事態となりました。避難所だった小中学校も浸水。至る所が泥に覆われている光景に、復興支援にあたってきたスタッフも言葉が出なかったと言います。



9月26日からYMCAは、全国のボランティアを募って泥かき作業にあたっています。断水の中での作業は手間もかかる上、乾いた泥が砂埃となって健康被害を及ぼします。何よりも被災者の落胆は大きく、引き続き物心両面からの支援が必要とされています。

各地で募金活動も開始しました。ご支援ご協力をお願いいたします。

- ゆうちょ銀行 振替口座（振替貯金）
00130-4-696497 日本YMCA同盟災害支援募金口
*「2024能登豪雨」とご記載ください。

- クレジットカードによる送金は下記サイトから
<https://srv.asp-bridge.net/ymca/privacy/2>



パレスチナの一年

2023年10月7日から一年。多くの命が奪われていく惨状を目の当たりにしながら、誰もこれを阻止できないまま、その混乱は周辺諸国にも広がりつつあります。

以前から「天井のない監獄」と言われてきたガザでYMCAは、スポーツなどを通じて青少年のメンタルヘルスの向上を目指して活動していましたが、12月に爆撃を受けて休止となりました。ヨルダン川西岸では東エルサレムYMCAが、紛争で負傷した人々へのリハビリや職業訓練、トラウマを抱えた子どもたちの支援にあたっています。

日本のYMCAは1990年代からパレスチナのYMCAと交流があり、青年たちがワークキャンプに参加するなどして行き来を続けてきましたが、現在日本からの参加者派遣は休止。皆さまからお預かりした国際協力募金は東エルサレムYMCAに送金して現地の活動を支えているほか、パレスチナの主要作物であるオリーブの苗木を送る「オリーブの木キャンペーン」を実施しています。

このキャンペーンは2002年、パレスチナのYMCAとYWCAによって始められたもので、占領下で破壊されてしまったオリーブ畑を再生することによって人々の暮らしを支えるという、武力によらない平和への取り組みです。現地YMCAとYWCAは、JAIと呼ぶ共同の事務所を設けて世界中に支援を呼びかけており、これまでの21年間で29万4千本の苗木が植えられました。

現地で奮闘する仲間たちの無事を祈るとともに、一日も早い停戦を願ってやみません。

詳細はこちら ▶



アジア13カ国から60人参加

第1回アジア太平洋 クリスチャン・ユース・アッセンブリー@韓国

アジア太平洋諸国およびロシアなど13カ国から、キリスト教に関連する団体のユース60人が9月4日～8日、韓国の済州島に集まり「第1回アジア太平洋クリスチャン・ユース・アッセンブリー」が開催されました。主催は「韓国YMCA全国連盟」と「韓国大学YMCA全国連盟」。日本からは中央大学と立教大学の学生YMCAメンバー3人が参加しました。



これは、グローバルな課題に対してリーダーシップを発揮できるユースを育てることを目的とするもので、今回の全体テーマは「平和と気候変動」でした。平和に関しては、1948年に済州島で起きた島民大量虐殺事件（済州島4・3事件）の現場や記念館を訪れて歴史の学びを深め、平和の大切さを再確認しました。気候変動に関しては、ワークショップを通して気候変動対策の必要性や気候正義実現のために何を行うべきかといった内容への理解を深めたほか、現地の市民が企画した環境保護や気候変動対策を求める街頭行進にも参加しました（=写真）。

参加した吉岡路乃さん（立教大学YMCA）は、「さまざまな国から来た友人たちと生活を共にしながら、立場を超えて対等に議論できたことが何よりの財産になりました」と語ってくれました。同アッセンブリーは今後、今回の参加者を中心に運営委員会が組織され、次年度以降も継続して開催の予定です。

日本YMCA同盟 田附 和久